

アフリカ—紛争地域から

写真・文 大崎 敦司
Atsushi Osaki



©Atsushi Osaki

平和をはばむ力/スーダン西部ダルフル地方で今も戦闘を続ける最強の反政府武装勢力「正義と平等運動」(JEM)の兵士たち。アフリカ系住民を、スーダン政府の支援を受けるアラブ系武装民兵の虐殺と迫害から自衛するとの名目で戦闘を激化させた=ダルフルで

二〇一一年のアフリカは、コートジボワール大統領選後の政治紛争と、南部スーダンの分離独立への住民投票、チュニジアとエジプトでの政変のニュースと共に幕を開けた。アフリカ諸国の独立ラッシュから半世紀。大きなポテンシャルを抱えた「希望の大陸」では、政治や民族、宗教を巡る紛争やテロが日常化し、見えにくくなる「不可視化」が進行している。

● 経済発展の裏で進む「揺らぎ」

二〇〇九年春まで七カ月間、タンザニアで国連の広報番組制作の仕事をした。年五%超の経済成長に沸くインド洋岸の経済首都ダルエスサラームや、僻地の農村で困窮する人々にインタビューをして回った。印象に残ったのが、都市に一極集中する豊かさ、内陸の農村部との経済格差の拡大。汚職で首相や閣僚、現職の国会議員らが辞任・逮捕される事件が相次ぐなか、多くの人が口にした腐敗した政治への怒りだった。

南部の同国政府の出先機関に着任後すぐ、キクウェテ大統領が南部視察に訪れた。大統領が乗る車は、住民から激しい投石を受けた。事件を見た大学教授は「貧しい南部の住民が最高指導者に直接抗議した。経済発展から取り残された人々には不満を強めている」と分析した。大統領は昨年一月に再選されたが、支持率は大きく低下した。今年一月にはアルーシャで野党の政治集会を政府が弾圧し、警察の発砲で死者が出た。隣国ケニアのような憲法改正を求める声、野党や人権団体、ムスリムの組織を中心に急拡大している。

職場のムスリムの同僚らとモスクで金曜礼拝を覗き、インド洋岸のダルエスや南東部の街で宗教指導者が貧困や政府・外国企業批判の説教をしていると聞いた。学校教師は、アメリカ中心のグローバル経済と外国企業、その下で搾取に走るタンザニア人富裕層が「貧困の元凶だ」と断じた。「イスラームの信仰を实践する人々が、格差の無い公正な社会を実現する、政教一致的な新政府の樹立を望む」とも語った。ダルエスのダウンタウンのカーリアコー市場では、ザンジバル島など住民の殆どがムスリムの地域が「必ず分離独立する」

独裁者の脱出／リベリアの首都の空港で、亡命するテラー大統領を見送る市民たち。「あなたを愛しているけど、出て行って！」と解放と自由への歓喜の歌を唄い踊った



©Atsushi Osaki



©Atsushi Osaki

子ども兵士の出撃／リベリアの首都モンロビア近郊に侵攻した反政府武装勢力も、政府軍も、多数の少年兵や少女兵を動員していた。多くは小中学生の幼さだった

と語り、ソマリアの反政府勢力や国際テロ組織「アルカイダ」を「イスラーム国家建設へ聖戦を戦っている」と擁護する若者にも出会った。

タンザニアはケニアと共に、一九九八年にアメリカ大使館への同時爆破テロが起きた国だ。翌年にナイロビで、黒く焼け焦げ、窓ガラスが落ちたアメリカ大使館の廃墟を見た衝撃は忘れられない。二〇〇二年末にはインド洋岸のモンバサで、イスラエル人観光客が宿泊中のホテルへの自爆攻撃と、国際空港を離陸したイスラエル旅客機への地对空ミサイル発射の同時テロも現場取材した。

アフリカ大陸は今も、アメリカ主導の世界的な「対テロ戦争」の最前線だ。アメリカは二〇〇八年秋、テロ組織の掃討作戦を行う「アフリカ軍」を新設。ジブチを拠点に、紅海対岸のイエメンやソマリア、東・西アフリカ諸国への軍事介入を強めている。タンザニアの専門家は地元紙の評論で、「アルカイダ」や「タリバン」を名乗る武装勢力が近年活動を活性化させている。モリタニアやマリ、ニジェール、ナイジェリアなどに「アメリカが逆にテロを拡散させている」と警鐘を鳴らしていた。

アフリカ各国で戦争やテロが見えにくくなり、「常在化」が進んでいる。政治権力の争奪や民族・宗教の境界線で続発する紛争。点として噴出するテロ。テロ組織と容疑者の追跡と拘束。首都では人々が「一見、平和」と安定、経済発展を享受しているように見えるが、彼らは国内や隣国で続いている同胞の殺害や暴力に、あまり関心が無いかのようだ。

●「純化」と「分離」が拡大する懸念

各国でムスリムが急増し、貧富の格差は正と「世直し」を求める声が、イスラームの厳格な戒律や社会正義の実現を目指す信仰復興運動と結びつき、世俗的な価値観や既存の政治体制と衝突を引き起こしている。国境を越えたグローバル化に抵抗感を覚える人々は、欧米が押し付ける政治の「民主化」や市場原理主義、物質主義に反発し、異なる価値観や宗教・民族を排除し、共通の生き方や信仰、アイデンティティを持つ人々

「よそ者は出て行け！」／コートジボワールのアビジャンで、反政府勢力との戦いと「外国人」排斥を呼びかける、バグボ大統領支持派の排外デモ



©Atsushi Osaki



©Atsushi Osaki

赦す。赦される。／94年のルワンダ虐殺後10年。首都キガリ郊外の村の教会で、刑期を終えて出所した加害者の若者たち（左の列）を受け入れようと、和解の握手を求める犠牲者の遺族（右）



©Atsushi Osaki

国際テロの脅威／イスラエル人観光客虐殺を狙う国際テロ組織「アルカイダ」の自爆テロで破壊されたケニア・モンバサの観光地の「パラダイス・ホテル」。犠牲者の大半は地元ギリヤマ族の踊り子の女性たちだった

が集まって「純化」と「分離」を目指す逆流も起きている。コートジボワールの紛争再燃の報に、二〇〇二〜〇四年の現地取材の記憶が、胸の痛みと共に蘇る。アフリカ五三カ国が統合へ歴史的一步を記した「アフリカ連合（AU）」が誕生して、まだ二カ月しか経っていない時、西アフリカの経済の中心だった国が真つ二つに分裂してしまっただけだ。

南部の経済首都アビジャンで、バグボ大統領支持派の街頭デモを見た。国旗を振り、「テロリストと戦え！外国人を追い出せ！」と叫ぶシユプレヒコール。政府系のテレビも新聞も「コートジボワール人のアイデンティティ」「愛国」という意味の『イボワリテ』という言葉を連呼していた。北隣のブルキナファソやマリからの移民労働者やムスリムが、市民や軍・

警察の暴力で命を奪われていた。南北の境界線に向かう途中、現地の通訳が「北部出身者」として受けてきた差別と、自らの「民族の歴史」を語り始めた。親類がブルキナやマリに住み、自分の肌を「南の人々の黒い肌と違う。体の細さも目の形も」と語った。進学時、出身地と部族名で合格を取り消されたという。

「植民地支配の前、北部の王国で、人々はイスラームの信仰を守り、遊牧と交易を営み、未開だった南部より豊かだった。フランス人が南部に経済拠点を築き、南の人々が権力と富を独占し、北の人々を差別するようになった」。北部を制圧した反政府勢力と、今回の大統領選に立候補したムスリムのワタラ元首相への共感、北部の「分離独立」への期待も漏らした。



©Atsushi Osaki

「未来を見る！」／コンゴ東部で反政府勢力に家族を皆殺しにされ、生きのびるために14歳で武装勢力に参加。兵士に強姦され、できた子を産んだ17歳の女性。「未来のために愛し、育てると決めた」と語った=ゴマで

その後、イラク戦争とフセイン政権の崩壊を現地取材してアフリカに戻ると、今度は「リベリア危機」が起き、テラー政権の崩壊と大統領の亡命を目撃した。

●アフリカの希望が消えぬように

南部スーダンがアフリカ五四番目の新国家として分離独立する動きに、私は希望と同時に、不安も感じている。二〇〇四年夏の取材時、ジュバはまだ北部の政府軍が支配。南部の人々は「暫定首都」と自称していた町ルンベックに小さな「国立銀行」や「最高裁判所」を作って新政府設立の準備をし、迫害と戦争がなくなる未来への希望を熱く語った。

私はその直前に、西部のダルフル地方で紛争を取材したばかりだった。宗教紛争が続くナイジェリア中部やコンゴ東部の紛争地も



飢えに耐えかねて／「世界最悪の人道危機」と呼ばれる紛争が続くダルフル地方からすぐのチャドの国境地帯で、緊急人道支援の食糧配給を待たずに、落ちた豆を頬張る難民の子どもたち

54番目の独立国へ／南部スーダンの独立へ「新政府軍」の訓練に励むスーダン人民解放軍(SPLA)の兵士たち。南北間で未確定の国境線や資源配分を巡り、今も紛争は続く＝ルンベックで



©Atsushi Osaki

©Atsushi Osaki

おおさき あつし／ジャーナリスト・津田塾大学講師（平和学・紛争研究）

慶應義塾大学法学部で小田英郎教授からアフリカ政治・紛争を学ぶ。在学中、白人政権のアパルトヘイト下の南アフリカ、独立時のナミビアなどを取材旅行。1990年に朝日新聞社に入社。外報部のアフリカ担当記者、アフリカ・中東特派員（ナイロビ支局長）としてアフリカ諸国の紛争やイラク戦争、パレスチナ・イスラエル紛争などを現地取材。国際協力機構（JICA）の派遣で国連の専門機関「国際労働機関」（ILO）とタンザニア政府のためのテレビ番組制作プロジェクトに従事。21年間でアフリカ33カ国を歩き、2001年から写真展や講演会などで映像でアフリカを伝えるNGO「Sangenjaya Magnum for Africa」（SAMAFA）も主宰。

歩いた。スーダンの分裂を、他の国の人々が「手本」とし、国の姿の見直しや国境線の書き換え、分離独立を目指す政治・宗教運動や武力紛争が拡大するのではないかと、今、複雑な思いで見守っている。北部は「非アフリカ化」の純化路線とイスラーム国家化を推進し、ダルフル地方の紛争解決や、ナイジェリアなど宗教的「境界」を抱える他のアフリカ諸国に大きな影響を与えるだろう。タンザニアでは二〇〇九年、アルーシャで国連の「ルワンダ国際戦犯法廷」も取材した。フツ族、ツチ族のアイデンティティを捨て、「ルワンダ人」「国民」という新しい帰属意識で心を埋めようと国をあげて呻吟しているルワンダ。そして肌の色も違う多民族が平和共



©Atsushi Osaki

戦争の真っ最中に／2001年1月、コンゴの首都キンシャサでのアフリカ杯サッカー大会。周辺10カ国が参戦し「第一次アフリカ世界大戦」と呼ばれた内戦で300万人以上の犠牲者が出る中、政府閣僚が観戦に勢揃いし、満員の大群衆は熱狂した。「戦争と日常」の異常な共存。この翌日、キンシャサでローラン・カビラ大統領（現大統領の父）が暗殺された

存を模索する南アフリカのように、「和解と再統合」を目指す動きもある。欧州の植民地宗主国が一方的に引いた国境線。矛盾だらけの「枠」のなかで民族や宗教対立を融和させ、異なる価値観や経済格差への不満を抑え、人々の「統合」を維持しようとするのか。無理につなぎ留めようとはせず、バラバラになっていく動きに任せるのか。それを選択するのは、アフリカの人々だ。だが、対立と暴力で罪もない人々が殺され、安定と発展の果実が摘み取られ、負のスパイラルに陥る未来は、もう見たくない。戦争やテロで真っ先に犠牲になるのは、子どもや女性たちなど罪もない、弱い人々だからだ。